

幼稚園における行事について

柴田 いつ

四日市市立保々幼稚園

幼稚園における行事は、幼児の生活の中に自然と位置づいて、それが刺戟となり、園生活のリズムに変化を加え、幼児たちの生活を豊かにしていくものでなければならぬと考えている。行事のための行事をするのでなく幼児の成長に役立ち、たのしさと充実感があり、余韻の残るような行事にと考えている。

「入園式」——新鮮で期待感のあるものに——
入園式までに、幼児をより理解し、ひとりひとりに適した指導をするために、一日入園や面接日を設けている。当園は、新入園児との保護者ならびに在園児あわせて収容できる施設がないため、午前午後に分

けて行っている。つまり四歳児・五歳児別々に入園式をもつのである。年長組は進級した幼児と、隣接の保育所（当園はフェンスへだてて、幼稚園と保育所と隣接）からくる五歳児とで編成されている。母親と朝登園し、まずテラスでやさしく担任に迎えられ、名札をつけてもらつてから、保育室に入つて自由に遊ぶ。（ままごと・人形・絵本・ブロック等、遊びとなるようなコ一ナーグループをしておく）。十時、七十四名の幼児と保護者で二十坪の保育室に入り、入園式を行う。園長の話のあと、各保育室に入り、意欲と期待の持てる担任の話を聞いたり歌をうたつたりして、お祝いのバッグをもらって帰る。（このバッグは前年度の幼児がつくったもの）。四歳児は午後じゅうたんを敷いた保育室で、お母さんと一緒に座り、安定感をもつて担任のお話

をして行っている。家庭的な雰囲気の中での四歳児別々の入園式をもつのである。年長組は進級した幼児と、隣接の保育所（当園はフェンスへだてて、幼稚園と保育所と隣接）からくる五歳児とで編成されている。母親と朝登園し、まずテラスでやさしく担任に迎えられ、名札をつけてもらつてから、保育室に入つて自由に遊ぶ。（ままごと・人形・絵本・ブロック等、遊びとなるようなコ一ナーグループをしておく）。十時、七十四名の幼児と保護者で二十坪の保育室に入り、入園式を行う。園長の話のあと、各保育室に入り、意欲と期待の持てる担任の話を聞いたり歌をうたつたりして、お祝いのバッグをもらって帰る。（このバッグは前年度の幼児がつくったもの）。四歳児は午後じゅうたんを敷いた保育室で、お母さんと一緒に座り、安定感をもつて担任のお話

〈運動会〉——頑張る力と楽しさを——

あくまで幼児たちが、生き生きとして、楽しんでやれる運動会であつて、見せるための運動会ではない。だから基本として、ひとりひとりが頑張って自分の力を出せる

を聞く。家庭的な雰囲気の中での四歳児別々の入園式をもつのである。年長組は進級した幼児と、隣接の保育所（当園はフェンスへだてて、幼稚園と保育所と隣接）からくる五歳児とで編成されている。母親と朝登園し、まずテラスでやさしく担任に迎えられ、名札をつけてもらつてから、保育室に入つて自由に遊ぶ。（ままごと・人形・絵本・ブロック等、遊びとなるようなコ一ナーグループをしておく）。十時、七十四名の幼児と保護者で二十坪の保育室に入り、入園式を行う。園長の話のあと、各保育室に入り、意欲と期待の持てる担任の話を聞いたり歌をうたつたりして、お祝いのバッグをもらって帰る。（このバッグは前年度の幼児がつくったもの）。四歳児は午後じゅうたんを敷いた保育室で、お母さんと一緒に座り、安定感をもつて担任のお話をみながら、また、五歳児については、幼

児の意見も尊重しながら計画を立ててい
る。すなわち、とび箱・平均台・マットなど、させられる活動でなく、毎日のつみあげの中で少しづつその子なりに挑戦していくとする力が湧き、友達とも励ましあつて、いけるような、そしてまた、クラス対抗など取り入れ、協力の大切さ、ルールの理解など競争心をもりあげてやるなかで知らせていくようになっている。ただ、幼児たちに毎日毎日練習を繰り返さなければならぬものでなく、今までの経験を生かして、簡単な中にも、しっかりと手を伸ばすとか、真剣にスタートラインに立つ、走る、歩くの基本的なことを、眞面目にやれる態度と、やりぬく力、そして、幼児たちに自信と、やったという成功感を味わわせてやることを目標にしている。また、それ以上に、教師自身の姿勢も、幼児たちに影響する

児といっしょになつて感動したり、考えたり、喜び合つたりすることは、幼児の気持に共感を呼び、意欲をもりあげていくことになる。やはり、平生の生活が基盤となつていくと思われるから、毎日が幼児にとって楽しく、きちんととして充実していることが望ましいと思われる。今後もこの気持を大事にしていきたいと考えている。

〈発表会〉——全身で表現できるように——

純粹であどけなく、そのものになりぎれりの四歳児、そして、役割を自分でこなせるようになり、さらに、自分なりにつくり出していく五歳児の発表会を毎年二月下旬に行っている。いわゆる一年間、あるいは二年間のまとめとして、総合的な発表会であるので、幼児の成長の姿をどう表現していくのか、幼児たちが、苦痛を感じるところは大きいと思われる。つまり、幼児といっしょになつて感動したり、考えたり、喜び合つたりすることは、幼児の気持に共感を呼び、意欲をもりあげていくことになる。やはり、平生の生活が基盤となつていくと思われるから、毎日が幼児にとって楽しく、きちんととして充実していることが望ましいと思われる。今後もこの気持を大事にしていきたいと考えている。

〈卒園式〉——心に残る卒園式に——

幼児期から児童期へ移行する大切なひと歩の基本的なことを、眞面目にやれる態度と、やりぬく力、そして、幼児たちに自信と、やったという成功感を味わわせてやることを目標にしている。また、それ以上に、教師自身の姿勢も、幼児たちに影響する

取り組むのではなく、意欲的に楽しんで、しかも、ひとりひとりの幼児の持味が生き、さらに向上していこうとする構えが見えてくるものを、教師と幼児とでつくりあげている。つまり既成の脚本の中へ幼児をはめこむのではなく、幼児たちの身近な生活中からとりあげ、幼児たちがどう感じとり、どのように表現していこうとするのか、工夫しあつていく過程を大切にしている。

行事の報告

のお別れは、在園児が保育室の前から門までの両側に並び、その中央をお祝いのバラをつけた卒園児が、カーネーションの可愛い花束をもらつて卓立つていく。

紙面の都合上、園外保育、遠足については省略するが、保育室より戸外へ、戸外より園外へというふうにできる限りおおらかな自然を求めて、幼児たちの心身の開放をねがい、幼児の好奇心や将来心を少しでも満足させてやるために配慮を常に行つてゐる。そして、円満な人格を培つてやるために、自然へのかかわりは、とくに重要であると思われるし、これらをふくめて年間における幼稚園の行事についてみなおし、幼児を中心に常に考えていかなければと思っている。

○分位) 入園式……入園する子どもと親達だけで行う。集団生活のスタートに緊張している子ども達の、その心をそのまま受けとめるために、在園児達の歓迎などのプログラムはさけ、短時間(記念写真を写しても五

◇ ◇ ◇

水沼 昭子

千葉・愛隣幼稚園

遠足……春は子ども全員と四歳児の親

で近くの公園へ。徒歩二〇分位。秋は年齢別で実施日、目的地をかえて行う。バスを利用して、しかし市内の公園。平常保育時間内で行う。親は付添わず、子どもと保育者で。年長が実施する日は、年少が休園してすべての保育者が同行する。(年少の時も同様)

運動会……練習はせずに当日を迎える。家族のプレイディ。ピクニックといった感じである。その場ですぐできるようなもの、その年によく遊んでいる遊びを行う。

かけっこやリレーなど子ども全員が参加する。又、当日の運営は年長時が受け持ち、親たちの手伝は、「蔭の助け手」という存在になつてもらう。参加賞にはドングリブローチ(ドングリとフェルトでつぶんで、みの虫のよにしてさげる)をもらう。特に

午後は親子が十二チームにわかれ、十五の関所の課題を定められた時間（二十分）の中でどれだけやり通せるかという「動物様は大きさ」なるゲームを行う。園庭のあちら、こちらで課題と取り組む親子のはえましい姿がみられて、まさに「大きさ」である。一番多く、課題を消化したチームに、秋の果物のベンダントが贈られる。最後は、手紙や名前をかいだ紙ヒヨーキをみんなでとばしておみやげにもらつて行く。整然とした運動会ではないが、皆が持味を生かして一日をすごすことができる楽しい会である。

卒園式……「お別れ」というより「出発」といった楽しい会にしたいと考えている。一年生になる楽しみ、大きくなつたうれしさを感じさせたいと思う。年長になつて行った一泊保育の時からの生活のグループ毎

に舞台に上り、園長先生が舞台下から証書と聖書を贈る。年少の時のエピソードが一人一人について話され成長した今を実感する。来賓の方は入学する学校の先生、又卒園して大学にいつたり、社会に出ている方々をおよびする。子どもたちの生活からかけ離れた方々はおよびしない。

クリスマス……わが国にとって一番大切な行事。親子でクリスマス礼拝を守り、クリスマス・ペーパーントは年長児全員で行う。役柄を決める時もすきな人物や物になる。羊飼いが女の子になつたりしてもかまわない。このペーパーントには毎年、年長が年少へ受け渡して行く。年長になつたらできるとたのみに待つて。衣装などもをくりひるがげるのかを伝えながら、これからも大人側が満足するような「行事」をしないで行くよう努力して行きたい。又、子どもたちが各自で作る。見せるというよりも各自が楽しんで参加する、そのほとえましい聖誕劇は素朴ではあるが、まさに馬

に舞台に上り、園長先生が舞台下から証書と聖書を贈る。年少の時のエピソードが新しい出来事、そのもののように思われる。